

本立寺跡と伊織霊水

井戸の分布地図を片手に、松本市内の井戸めぐりを楽しんでおられる市民や旅行者の姿を見かけます。井戸のなかに「伊織^{いおり}霊水」と命名されたところがあります。そこは、かつて本立寺^{ほんりゅうじ}という寺があった場所です。本立寺は寺が集まっている城下の南東部の一角にあった寺で、中町の側から門前に延びた小路は、寺の名をとって本立寺小路と呼ばれています。

1 本立寺

(1) いろいろな寺が出入りした場所

本立寺は、『信府統記』に法華宗寺院として「松栄山本立寺 甲州身延久遠寺末ナリ、城下中町ニアリ」とあり、さらに続けて「当寺開基ハ天正十一癸未年久遠寺拾七世ノ聖人慈雲院日新ノ草創ナリ」と記されています。

法華宗の寺として、同書は同じ中町にあった妙法山広福寺（開基寂定院日瑛 慶長十九年草創）と渚の迦葉山妙福寺（身延山日意上人 永正元年）の3寺を挙げるだけです。法華宗寺院は数は多くありませんでした。

本立寺の場所は、さまざまな寺院が入れ替わったことが旧版『松本市史』に書かれています。城主が移動するたびに、城主の家と関係が深い寺院は前任地からついて来たり、移動先へついて行ったりしました。本立寺の場所ではそれを典型的にみることができます。同書からその様子をみましょう。



本立寺小路

① 本立寺が現在地に移るまで

本立寺の前身は出川^{いでがわ}にあったといえます。それを島立貞永^{しまだちさだなが}が地蔵清水^{じぞうしみず}へ移し、小笠原貞慶^{おがさわらさだちか}が上土^{かみつち}に移して慈雲院日新上人をよんで中興開山にし、石川康長が慶長の初年に中町の現在地へ移したといえます。石川数正の代に提出させたとみられている検地帳には、本立寺は庄内のなかに50石の寺領を持っており、この石高は浅間^{あさま}の大隆寺^{だいろんじ}の100石、横田の宗玄寺78石余に次ぐものです（『長野県史』近世史料編第5巻（1））。

② 小笠原秀政の代

小笠原秀政の代になると、母親の延寿院^{えんじゅいん}が本立寺に帰依して菩提寺にしたため、秀政は寺域を整備しました。このことは「笠系大成」の秀政の項に記述がありますので、あとでふれます。

小笠原氏は元和3（1617）年に明石へ動きます。このとき5世住持日護は位牌を奉じてこれに従い、さらに小倉へも移動しました。

③ 前の戸田氏の代

小笠原氏のあとに来た戸田氏は全久院^{ぜんきゅういん}が菩提寺でしたので、これを高崎からともない、松本では空いていた本立寺を全久院とします。塔頭には智仙院・寿量院があったといえます。全久院は禅宗ですから、もともと法華宗を信仰していた人々はもとのように法華宗の寺を置いてほしいと願いました。そのため戸田氏は下横田町の現恵光院^{げんけいこういん}ある場所に置いた妙光寺^{みょうこうじ}を、寛永3（1626）年に本立寺の場所に移し、全久院を恵向院のある場所へ移して入れ替えを行ったといえます。戸田氏が明石に去るとき、妙光寺も全久院も藩主について移動しました（のちに再び戸田氏が松本へもどるとこの両寺も松本へ戻ります）。

④松平直政の代以降

次に来た松平直政は天倫寺^{てんりんじ}を伴ってきて、妙光寺が去ってあいた本立寺の場所へ入れます。松平氏が松江へ移動になると天倫寺も移動し、再び空き寺になりました。そこで、檀徒の人々がはかり、日右上人を六世として本立寺を再興したといひます。それ以後明治の廃仏毀釈まで法灯が続きました。

このように、本立寺の場所は、藩主が変わるたびに寺が入れ替わっていた場所であつたことがわかります。

⑤小笠原秀政の年譜の記事

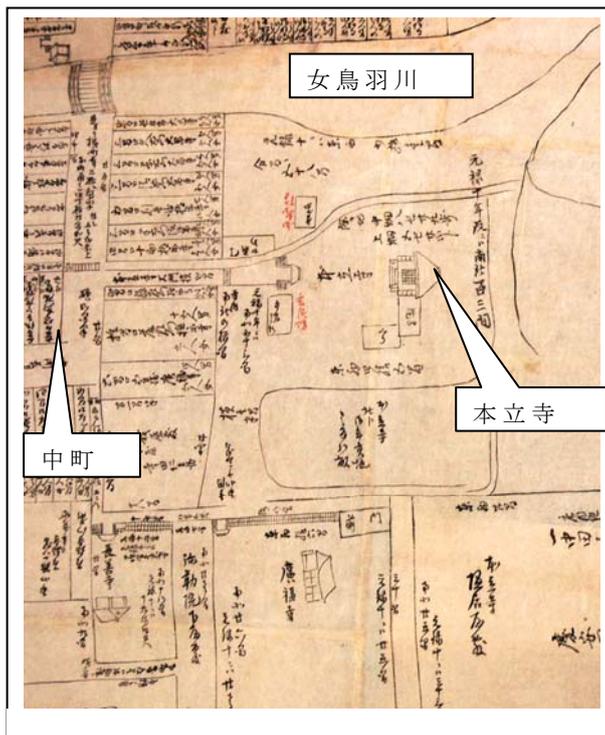
先にふれましたが、小笠原秀政の年譜には本立寺についてももう少し詳しい記述があります。本立寺は深志の地にあつた古い草庵で須蔵坊といつた、島立右近が修造した、天正11(1583)年に中田対馬守繁吉・源次郎吉直が小笠原貞慶に再興を願ひで身延山から日新上人をまねいて中興開山とした、小笠原氏が関東へ移り再び松本へ戻ると本立寺は衰微してゐた、ちょうど京都から日禪上人が松本へきたので、秀政は母親の延寿院と相談して寺を修繕し、日禪上人を中興開山として成道山本立寺を復興した、上人はまもなく日甄上人に住職を譲つて京都に帰つた、以上のように書かれています(新編信濃史料叢書第12巻「小笠原秀政年譜」)。

(2)水野氏時代の絵図から

水野氏時代の「元禄期松本城下絵図」をみると、中町の横町から小路が門まで続きその脇には水路があつたように描かれています。

寺域は広く、北側が51間(約92m)南側が45間、東側は103間あり、年貢地の畠もありました。建物は本堂と書院と庫裏が描かれています。

塔頭としては2寺があつたようで、門の近くに玄良坊と圓蔵坊という名が書かれています。南には広福寺が並び、その東には本立寺の隠居屋敷がありました。



本立寺近辺 元禄期松本城下町絵図より

2 伊織霊水

本立寺の跡に井戸があつて「伊織霊水」と名づけられています。この井戸の脇に鈴木伊織の墓所があることに由来しています。



伊織霊水



鈴木伊織の墓石

鈴木伊織については、貞享3（1686）年に起きた「貞享騒動（加助騒動）」に関係した伝説が残り、旧版『松本市史』に紹介されています。それによると多田加助が勢高で処刑される時、水野家の重役であった鈴木伊織が江戸から早馬で藩主の赦免状を持って駆けつけてきた、ところが蟻ヶ崎口の大門口の橋のところまで来たときすでに加助の処刑は終わっていた、間に合わなかった伊織は落胆し、そこから乗ってきた馬を返した、そこでこの橋を「駒返り橋」というようになった、また、この近辺を駒町というようになった、という話です。『松本市史』は殿様が赦免状をだせるわけがないと、この伝説に懐疑的です。

貞享騒動のことを伝える史料には鈴木伊織の活躍を記すものではなく、貞享騒動と伊織の関係ははっきりしていません。藩庁のなかでどのような立場でどう行動したかはわかりませんが、このような伝説が巷の人々の口に乗っていたことは、伊織が農民たちに何らかの同情をかけていたことによるのではないかと市史の筆者は推測しています。

霊水の横に石碑が2基たっています。向って右は小里頼永市長の筆になる顕彰碑、左側の碑は伊織の墓と伝えるものです。その碑の前面に「元禄三庚午天 帰真正浄院 清岩日到居士忌儀 十月三日」とあり、裏面に「鈴木伊織頼常」とあります。伊織の名は「頼常」、死去したのは元禄3（1690）年ということが分かります。安曇郡の長尾組組手代であった甕忠左衛門が書き留めた「御用留日記」の元禄3年の部分に次のような記述があります。

「十月三日ノ夜五ツ時分、鈴木伊織殿御死去之由、同四日昼時分ニ百瀬久米右エ門ヨリ申来候」

「十月四日伊織殿御死去ニ付、在々出家衆・庄や・百姓御悔として、蔵人殿へ参候事 無用之由被仰遣候 郷中へ申ふれ候」（『信州安曇郡長尾組組手代 御用留日記』下）

鈴木伊織亡くなった時、村々の人々のなかに息子（蔵人）にお悔やみを言いに行こうとする動きがあって、藩ではそれを禁止しています。城下の鈴木宅へ集まる村々の百姓の動きが4年前の貞享騒動のようにならないようにという藩側の警戒心からの命令とも読み取れますが、わざわざ郷中に触れまわして禁じなければいけないような動きが村々にはあったということです。このことは、鈴木伊織が村々の農民層から大変支持されていたことの表れとみてよいでしょう。伊織が農村や農民にたいしてどのようなことをおこなったのか大変興味があるところですが、その具体はわかりません。